

戦後の科学よみもの

小 川 真理子

基礎教育課程

Science Books for Children (1945～1949)

OGAWA Mariko

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 4, 2011 ; Accepted January 12, 2012)

1. はじめに

今まで数回にわたって、日本の科学よみものの変遷について述べてきた¹⁻³⁾。しかし、これまで述べてきたのは主に1960年以降のもので、特に70年代に花開くように多彩に作られた子どものための科学よみものについてであった。

今回はそれよりも以前の、戦後の数年間に出版された科学よみものについて様子を見てみたい。

2. 戦争直後の出版について

1945年8月、戦争が終わり、平和な時代がやってきた。とはいえ、食料も物資もなく人々は本を読むよりも先に食べることに精いっぱいだった。そんな時、本を買う余裕もない時代に本、なかでも子どもの本など出版する人はいなかったのではないか、というのが筆者の感覚であった。国立国会図書館が設立されたのが1948年、納本制度はその年の5月から始められた。ということは、それ以前の出版物を一括して所蔵しているところはない、ということである。

ところが意外なところに、戦争直後の出版物が集められていた。戦争終了後、日本を統治下に置いた米軍のGHQである。GHQは占領政策の一環としてあらゆるメディアの検閲を行った。児童書もその例外ではなかった。検閲を担当したGHQの民間検閲局の歴史課の責任者であったブランゲ博士は、検閲済みの出版物に着目し、それを米国に持ち帰り勤務していたメリーランド大学に寄付した。それらの出版物は現在メリーランド大学ブランゲ文庫として管理されている。

ブランゲ文庫を見ると、戦争直後であるにもかかわらず膨大な本が出版されていたことに、まず驚かされる。そして、そのような時代に日本人が真理を求めていたこと、子どもたちに真理を伝えたいと思っていたことに深

い敬意の念を感じる。

本稿では上記ブランゲ文庫を中心に、戦争直後の子どもの本の出版、なかでも科学の本がどのようなものであったのかを見ていきたいと思う。

3. GHQの検閲について⁴⁾

GHQによる検閲についてはすでに多くの本で述べられている⁵⁾、本稿の趣旨とはずれるので、出版物の検閲に関してごく簡単に触れるのみとする。

検閲は民間検閲局（CCD）により、1945年9月から1949年10月まで、全国4か所に設けた地区検閲局（東京、大阪、福岡、札幌）で行われた。出版物のみならず、映画、演劇、放送、紙芝居に至るあらゆるメディアが対象になったようである。

事前検閲では民間検閲局にゲラ刷り2部を提出し、検閲にパスすると出版が許可された。違反に問われた場合はChange（変更）、Delete（削除）、Suppress（発行禁止）、Hold（保留）などの処分を受けた。変更に関しては墨塗りや挿入などの訂正は許されなかったため、変更後の本を実際に購入した人たちは、検閲があったこと、その本が検閲で訂正を受けたことなどは知る由もなかった。

検閲を受けた出版物や検閲文書は保管され、今ではメリーランド大学に保管されている。これはメリーランド大学の歴史学科教授であったブランゲ博士が、1946年に来日、検閲局歴史課の責任者として検閲に携わった後、これらの資料を持ち帰ったためであり、現在ではブランゲ文庫として保存、管理されている。

ブランゲ文庫に所蔵されている資料は、

新聞	18,047タイトル
雑誌	13,799タイトル
図書・パンフレット	約71,000タイトル
報道写真	約10,000枚
ポスター	90枚
地図	約640枚

と発表されており、膨大なものである。

4. プランゲ文庫に見る児童書

プランゲ文庫には当然児童書も数多く含まれている。
その内訳は

	タイトル数	冊数
読み物	4262	5425
絵本	1602	1924
まんが・絵物語	2072	2450
その他	85	106
計	8021	9905

である。

書名	シリーズ名	著者	出版社	出版年
遊びの理科研究	少年・理科の研究叢書	内藤卯三郎	研究社	1948
家畜の歴史物語		松丸志摩三	霞ヶ関書房	1946
魚の生活	少国民のために	末広恭雄	岩波書店	1948
魚の世界	愛育文庫	寺尾新	愛育社	1947
少年世界数学史		藤原安治郎	扶桑書房	1948
雀		金野細雨	民聲新報社	1946
石炭物語	少国民文化読本	木下亀城	西日本新聞社	1947
旅で見た自然界の不思議		宮下正美	札幌講談社	1947
動物園での研究	少年・理科の研究叢書	高島春雄	研究社	1948
日本の木		小津茂郎	大日本雄弁会講談社	1946
物語 少年野口英世		橘輝政	山水社	1946

訂正を求められた理由は以下の通りである。

書名	理由
遊びの理科研究	錘に使っているコインに関して、お金には菊の紋章が入っているから他の用途に使ってはいけないとしている。
家畜の歴史物語	古代の家畜に関して、天照大神が史実であるように書かれている。
魚の生活	今や日本が勢力を伸ばしつつある南方の国々という記述がある。
魚の世界	魚雷に関して、日本の魚雷が優秀だったという記述がある。

その他のなかにはぬり絵、紙芝居の台本などさまざまなものが含まれている。ぬり絵などは検閲の対象ではなかったが、出版社が制作したものは他のものと同様に検閲局に提出されたようである。

戦前の挙国一致で何もかもを戦争に向けて力を尽くしていた時代、その後の戦後の食糧もなく混乱していた時代にあって、これだけの出版物が出版されようとしていたこと自体、驚きである。日本人の精神力の高さを感じさせるものである。

その時代の物資不足から質の悪い紙での印刷で出版されたもののほとんどは消失してしまったであろうが、プランゲ文庫としてそのまま残されているということは非常に貴重であると言えよう。

児童書のうちで検閲で違反とされて訂正・削除を求められたものは84冊である。そのうち科学読み物は10冊であった。

5. 検閲を受けた科学読み物

検閲で訂正を求められた科学読み物は、以下のものである。

少年世界数学史	奥付に「検閲済」と書いてあるので、それを削除。
雀	奥付に「検閲済」と書いてあるので、それを削除。
石炭物語	講和会議の結果有力な炭田が外国に譲渡されるかもしれないという記述がある。
旅で見た自然界の不思議	揚子江の長さが日本の長さとは比べているが、その日本の南端を台湾としていた。
動物園での研究	オットセイの生息地である海豹島が日本の国土としてある。
日本の木	「山の戦士の学校」「神国日本の木」の章が削除命令を受けた。

物語 少年野口英世	黄熱病を研究する野口を評して、大和魂、大日本帝国の名譽にかけて等の文言がある
-----------	--

戦後出版されるものであるにもかかわらず、日本が南方に勢力を伸ばしつつあるなどの記述は不思議に感じる。しかしこれらの本の中には、『遊びの理科研究』や『動物園での研究』のように、戦前に出版されたものの再版というものもあった。そのため戦前の記述が残っていたのだろう。

検閲で削除、訂正の指令を受けたものは児童書全体では51タイトルにのぼった。児童書全体では指令を受けた割合は1.2%であり、科学の本では1.6%であった。割合としては科学の本のほうが全体の中で少し大きいとも言えるが、件数としてそう多い数ではないので、このことから何らかの結論をだすことは難しい。

6. 戦後出版された科学読み物

プランゲ文庫に収蔵されている科学読み物は680タイトルである。出版年は以下のとおりである。

出版年	出版点数
1945年	1
1946年	42
1947年	111
1948年	262
1949年	263
不明	1

戦争終結が1945年8月15日、GHQの検閲開始が9月からということを見ると、1945年に1点の申請があったということ自体、出版する側のものすごい熱意を感じる。

これは、『ABC ドウブツエン』（ABC文庫 イヅカレイジ作 内田書店）⁶⁾である。ABCという言葉が入っていることからしても、戦前のものの再版ではあり得ず、戦後に作られたものであろう。

その後、1946年はそれほど多くないにしても年を追って出版点数が増えてくる。1948年1949年の262、3冊という数は驚くべき数字である。筆者の前回の報告によると、1970年代でも年間100冊を超えていない³⁾。戦後の物資の不足状況を鑑みると、このように多くの出版がなされたことは驚異である。これほどの出版に対する情熱は、どこから来たのであろうか。

東京帝国大学教授であった機械工学者富塚清は戦後、おもしろくて為になる創作科学童話『まきわり』⁷⁾を出版しているが、そのはしがきの中で次のように述べてい

る。

「・私が日本人をよくしていこうと思って日頃言ってきたことは、子どものうちから吹き込んでいかないと効き目がうすいとわかった。

・理詰めに、よく考え、実際にしらべ確かめるという精神（合理、実験の精神）を子どもに持たせる」

多くの日本人は、戦争に負けたことの反省から、またはそれまで伝えたかったことを子どもたちに伝えられなかったもどかしさから、自分の理想の科学観を伝えようとしていたのではないだろうか。少し後の1950年、岩波少年文庫の創刊の言葉にも、以下の文章がある。

「一物も残さず焼きはらわれた街に、草が萌え出し、いためつけられた街路樹からも、若々しい枝が空に向かって伸びていった。戦後、いたるところに見た草木の、あのめざましい姿は、私たちに、いま何を大切に、何に期待すべきかを教える。未曾有の崩壊を経て、まだ立ちなおらない今日の日本に、少年期を過ごしつつある人々こそ、私たちの社会にとって、正にあのみずみずしい草の葉であり、若々しい枝なのである。」⁸⁾

そして、その萌芽に明るい陽光をさし入れ、豊かな水分を培うことが、この文庫の目的である、と書かれている。人々は未来を子どもたちに期待したのであり、その一つが出版として現れたのだと言えるだろう。

それでは、どのような分野の本がどの程度出版されていたのだろうか。図1にその詳細を示す。

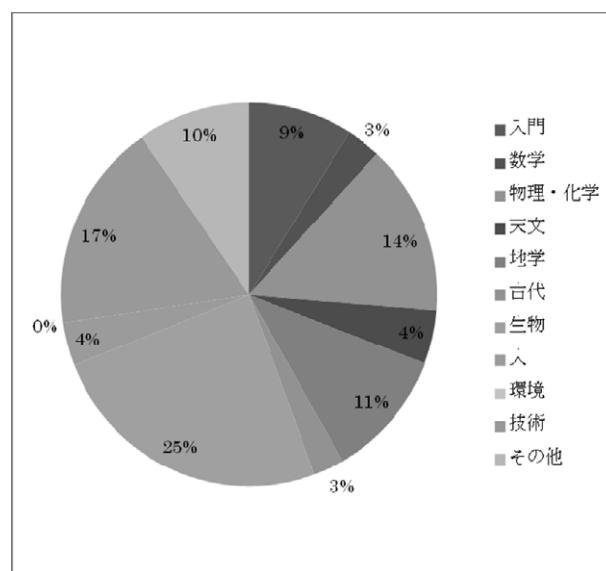


図1 1945～1949年出版の科学読み物

近年の様子と比べてみよう。

2003年の場合は図2の通りであった⁴⁾。

図1と図2を比較してすぐにわかることは、物理・化学分野、及び地学分野の本が非常に少なくなっているこ

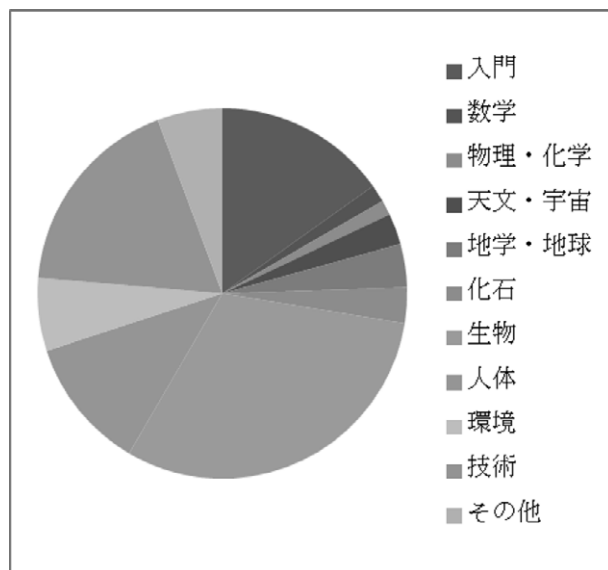


図2 2003年出版の科学読み物

とである。逆に多くなっているのは入門、生物、人体などである。一般的に言えるのは、ある程度勉強を必要とするものは減ってきており、特別な知識のいらないものは増えてきている。「あれ？」と疑問に思うのは科学のはじまりであり、そのような本が近年増えてきているのは喜ばしいことではあるが、その後につなげる、自分で考えさせ、深めていくような本が減っていることは心配である。日本の子どもたちの理科離れ、本を出版しても売れないということが出版点数が少ない理由の一つかもしれない。しかしまた、本がないから物理・化学・地学を好きになるチャンスも少ないのである。この分野の本が数多く出版されることが、今後の日本にとっては大切であろう。

戦後の出版物の中には環境に関する本はない。当時は環境問題がなかったわけではないだろう。しかし戦後高度経済成長を遂げるのと並行して、多くの公害が発生し環境は著しく悪化してきた。環境に関する出版が増えてきたのはそのような時代背景の現れであると思う。

どの分野の本が多かった等の傾向を述べたが、それでは内容的には現代の本とどのように違う、または似ているのだろう。

出版の意図は「子どもに自然の不思議を伝えたい」というその点は現代も戦争直後も同じであろう。しかし、そのなかでも「合理的な考え方をしていく」ことを伝えたいという意思が鮮明に表れているのが特徴である。

「知識を与えるのではなく、科学がどのように創られて行くかを伝える」(『音を見る話』⁹⁾)とか、「本を読むのは自分が考える助けにするためである」(『子供の気象学』¹⁰⁾)、「子供の持つ可能性を大人はつぶさないように

しよう」(『子供の天文学』¹¹⁾)などの記述が目立つ。戦争直後はDDTの洗礼を受けた時代でもある。本の中でもDDTの威力について述べているものもある(『自然のしくみ』¹²⁾)。本の出版された1948年はDDTを発見したヘルマン・ミュラーがノーベル賞を受賞した年でもある。DDTの環境毒性を指摘したレイチェル・カーソンの“Silent Spring”(『沈黙の春』)¹³⁾が出版されたのが1962年であるから、1948年当時はDDTの明るい面しか見えておらず、奇跡の薬品としてもはやされていた。

3月11日の津波の被害は目を覆うばかりであったが、その後東南海地震の危険性が叫ばれるようになってきた。1946年に南海大地震が起きているが、戦後のどさくさであまりきちんと報道されず一般の認識は少ない。その南海地震の調査をもとにして『生きている地球 地震と津波』¹⁴⁾は出版されている。現代でも通用する内容であり、今回の東日本大震災にも通ずるところが多い。内容は今も生きているのに、ほとんど目にする機会がなく、読むことが難しいのは残念である(『生きている地球地震と津波』は、国会図書館のデジタルライブラリーからネットで読むことが可能である)。

7. 終わりに

戦後日本には本がなくて読書などできなかつただろうという予想を大きく裏切って、数多くの出版がなされていたことが明らかになった。確かに紙質も印刷も悪く、仙花紙時代とも呼ばれた時代である。各家庭で読まれたものはすぐにボロボロになって捨てられたであろう。しかしそれがきちんと保存され、現代でも読めるようにきちんと管理されていたということはありがたいことである。多くの本の内容はきちんとしているし、非常に面白く書かれていて、現代でもそのまま通用する内容である。戦争への反省から書かれた良質の科学読み物を、ぜひ再版して今の子どもたちにも読み継いでいてもらいたいものである。特に物理・化学分野や地学分野の本が少ない昨今、その分野の本を増やすためにもかつて出版されたものを見直すことは重要ではないだろうか。

プラング文庫の所蔵メディアのうち、新聞・雑誌に関しては国会図書館のサイトから検索・閲覧することができる¹⁵⁾が、児童書に関してはまだ整備が進んでいない。今後の整備が待たれるところである。

註

- 1) 「日本の科学読物の変遷—最近30年間をかえりみて—」小川真理子 芸術世界 Vol. 7 (2001)
- 2) 「子どもの科学読物出版の諸要因」小川真理子 芸術世界 Vol. 8 (2002)
- 3) 「子どものための科学読物の動向」小川真理子 芸術世界 Vol.

- 15 (2009)
- 4) 『占領下の児童書検閲—プランゲ文庫・児童読み物に探る—』
谷暎子 新読書社 (2004)
- 5) 『閉された言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』(文春文庫)
江藤淳 文藝春秋社 (1994)
- 6) 『ABC ドウブツエン』ABC 文庫 イイツカレイジ 内田書店
(1945)
- 7) 『まきわり』富塚清 世界文化社 (1946)
- 8) [http://www.hyakuchomori.co.jp/book/bunko/iwanami/vorwort
1950. html](http://www.hyakuchomori.co.jp/book/bunko/iwanami/vorwort1950.html)
- 9) 『音をみる話』今堀克己 北方出版社 (1949)
- 10) 『子供の気象学』中村左衛門太郎 恒星社厚生閣 (1949)
- 11) 『子供の天文学』山本一清 恒星社厚生閣 (1948)
- 12) 『自然のしくみ』服部静雄 妙義出版社 (1948)
- 13) 『Silent Spring』Rachel Carson Hamilton (1962) 日本語版は
『生と死の妙薬』青樹繁一訳 新潮社 (1964)、新装版は『沈
黙の春』新潮社
- 14) 『生きている地球 地震と津波』学習文庫 永田武 東洋図書
(1948)
- 15) <http://opac.ndl.go.jp/Process>